



僕が僕であるために



学生の皆さん、こんにちは。このコラムでは、私の好きな音楽や文学を中心に、皆さんと語り合ってみたい作品を紹介したいと思います。

写真は、大学6回生の時に友人Tの下宿で撮影したものです。ずいぶんと気取ったポーズですが、二十代半ばの幸福感と、何ものをも恐れぬ気概が感じられ、懐かしい写真です。当時はいつぱしの文学青年、音楽青年を気取っていました。フランス象徴派の詩人、ポール・ヴァレリーに憧れ、彼のように生きてみたいと真剣に考えていましたし、リヒテルの演奏するバッハ平均律ピアノ曲集を心の糧にしていました。その一方で松田聖子や竹内まりやも大好きでした。

さて、今回は尾崎豊の『僕が僕であるために』を紹介したいと思います。1983年にリリースされたデビューアルバム『十七歳の地図』の最後に収められた曲です。今日別れる男女を、なぜか明るく爽やかに描いています。尾崎は一番

のサビで「僕が僕であるために勝ち続けなきゃならない 正しいものは何なのかそれがこの胸に解るまで 僕は…(中略) …この冷たい街の風に歌い続けてる」*と歌っています。尾崎が一生問い続けたテーマです。この曲が素晴らしいと思うのは、二番のサビで、別れる彼女に向かい、「君が君であるために勝ち続けなきゃならない 正しいものは何なのかそれがこの胸に解るまで 君は…(中略) …この冷たい街の風に歌い続けてる」*と歌いかけているところです。他者に対する尾崎のリスベクトを感じます。

ヘルマン・ヘッセは小説『데미アン』で「人間の使命はおれに戻ることにだ」というテーマを描いていますが、尾崎の音楽にも通じるものがあります。この曲は、「自分とは何だろう?」という問いに誠実に向き合うすべての人間への応援歌だと思っています。

📖 学長 内木宏延

*『僕が僕であるために』(作詞・作曲：尾崎豊)より引用